

経営一転語 43 全部原価計算の誤り（1）

今回から2回にわたって、「全部原価計算の誤り」について解説していきます。タイトルを読んで誤解される方もいらっしゃるかもしれませんので、誤解のないように最初に申し上げておきたいと思います。

「学問的に全部原価計算をして、製品の原価を計算するということはあり得るのですが、経営判断をするときに全部原価計算をしては、判断を誤るのだ。」ということこれから解説していきたいと思います。

製造業を営んでいる会社で、製品に全部の経費を配賦する「全部原価計算」をしているところがほとんどなのではないでしょうか。

実は、単位当たり（一個あたり）の原価計算は、経営的には何の役にも立ちません。

全部原価計算は、変動する生産数量に、変動しない固定費までも配賦するという方法です。そういう方法をとりますと、生産数量が変われば、単位当たりの固定費の配賦が、その都度変わり、それに伴って、製品の原価が変わってしまいます。

少しわかりにくいかもしれませんので、単純数値モデルを用いて、説明してみしましょう。あるメーカーで、商品を100個生産しました。かかった変動費（材料費など）は20円、固定費は人件費10円、経費25円、減価償却費5円だとしましょう。

この製品1個あたりの製造原価を計算しますと、製造経費の合計は20円+10円+25円+5円で60円。100個製造しましたので、60円÷100個で0.6円です。

このメーカーが同じ製品を200個製造したとしましょう。そうしますと、変動費は40円（製造量が倍になりましたので倍になります。）、固定費は人件費10円、経費25円、減価償却費5円で、変化ありません。

この場合の製品1個あたりの製造原価を計算しますと、製造経費の合計は40円+10円+25円+5円で80円。200個製造しましたので、80円÷200個で0.4円です。

同じ物を作っているのに、製品一個あたりの原価が0.6円から0.4円に変わりました。全部原価計算論者は、このような会計処理をなさいと言ってい

ます。

確かに、大量生産をすると、1個あたりの原価が下がるということは、「規模の経済」、「大量生産のコスト削減効果」として当たり前ののですが、大量に生産しても、売れなければ経費がかかるだけで、会社の存続はできません。売れて初めて経費を回収できますので、大量生産すれば原価が下がるから造ればよいのだというものではありません。

結局、生産数量が変わる度に、原価が変動するので、「会社としてどうすればよいか」という方針が出せないのです。

ということは、単位当たりの原価など計算しない方がよいのです。経営的には、無駄な計算はしないことです。

では、どうすればよいかは、次回に述べましょう。

<参考>

| | |
|---------|----------------------|
| 製造数量 | 100 個 |
| 変動費 | 20 円 |
| 固定費 | 40 円 |
| 人件費 | 10 円 |
| 経費 | 25 円 |
| 減価償却費 | 5 円 |
| 一個当たり原価 | |
| | 60 円 ÷ 100 個 = 0.6 円 |

| | |
|---------|----------------------|
| 製造数量 | 200 個 |
| 変動費 | 40 円 |
| 固定費 | 40 円 |
| 人件費 | 10 円 |
| 経費 | 25 円 |
| 減価償却費 | 5 円 |
| 一個当たり原価 | |
| | 80 円 ÷ 200 個 = 0.4 円 |